

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 15 号 / 2017 年 1 月 / 編集：庄子真岐（石巻専修大学）

慶長使節 400 年記念学術講演

支倉常長が旅した 17 世紀初期のメキシコ

中央大学名誉教授 国本 伊代

1610 年代の支倉常長遣欧使節については、一次資料を駆使してまとめられた学術書、それらを参考にして書かれた一般書、小説、さらには旅路の足跡を辿った写真集まで、日本では数多く刊行されている。これらの日本語で読める出版物だけでなく、外国語で書かれた書物も少なくない。しかしこれらに共通して欠けているのが、当時スペインの植民地で「ヌエバエスパーニャ副王領」と呼ばれていたメキシコの太平洋岸のアカプルコからメキシコ市を経てメキシコ湾岸のベラクルスに至る陸路の旅に関する記録である。この 17 世紀初期に陸路でメキシコ中央部を横断した支倉常長一行の足跡を知りたくなった筆者は、メキシコの国立図書館で古地図と関連資料を調べてみた。さらに現代の交通手段である車で、アカプルコ→メキシコ市→ベラクルスの旅を試みた。

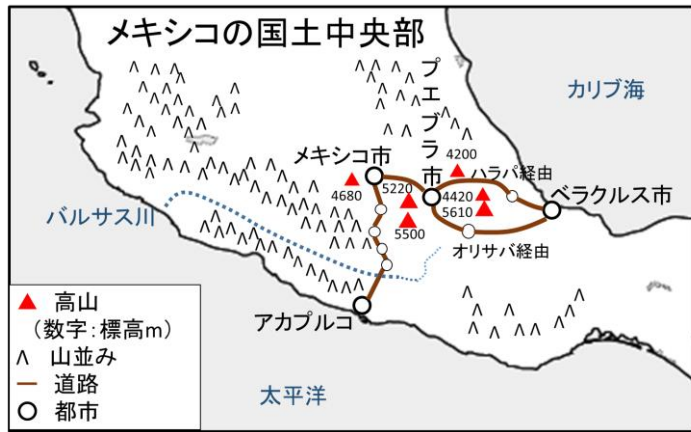
17 世紀初頭のアカプルコとメキシコ市を結ぶ道路状況に関する資料は非常に少ない。しかしメキシコ市とベラクルスを結ぶ「王の道」と呼ばれた幹線道路については、多くの資料が存在する。その違いは、当時の植民地開発の進展状況にある。1521 年にアステカ帝国を征服したスペイン人たちは、16 世紀半ばから国土中央部から北部にかけていくつもの銀鉱を発見した。その結果、植民地の統治機関が短期間で設置され、スペイン国王の分身である副王を頂点とするヌエバエスパーニャ副王領の支配体制が 16 世末までにほぼ出来上がった。採掘された銀は王の道として整備された街道を辿って鉱山からメキシコ市に運ばれ、さらにベラクルスまで運ばれて、その後スペインへ送られた。アステカ帝国時代に利用されていたメキシコ市とベラクルスを結ぶ道を、スペイン人たちは使用した。しかし車輪を知らなかったアステカ時代のヒトが歩く古道を馬やロバやラバ

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku が引く車の通れる王の道にするのは、容易ではなかったであろう。

一方、メキシコ市とアカプルコ間の古道は、コルテスが送り出した探検隊によって発見されていたが、17 世紀初頭でもそれほど整備されていなかった。その最大の理由は、のちに天然の良港と呼ばれるようになるアカプルコ湾の陸地周辺がもともとアステカ帝国の支配圏外にあったことにある。フィリピンがスペイン人によって征服され、1571 年にマニラとアカプルコ間の航路が確立すると、アジア貿易への関心が高まり交易港としてのアカプルコの整備と防衛がはじまった。しかし 17 世紀初頭でもマニラ・ガレオン船がアカプルコに到着するのは 1~2 年に 1 度ほどである。ガレオン船が到着すると、「フェリア」と呼ばれた東洋の物産市が開かれ、中国の絹や陶磁器などを買い付けるために内陸部から商人たちがやってきた。しかし彼らの滞在はフェリアの期間中だけで、他の時期はメキシコ市から派遣された少数の軍人や役人と家族が滞在する小さな浜辺の村であった。海賊からアカプルコを守るために 16 世紀末に建設がはじまったサンディエゴ要塞は、支倉一行が到着した 1614 年にはまだ完成しておらず、地形的にも高度がなく規模も小さい。そしてそれほど遠くないところに街がつけられていた。

アカプルコからメキシコ市へ向かう道は、険しい山並みの裾野を縫うように続く、長い道のりである。メキシコ有数の大河バルサス川は深い山間の谷川になっており、渡るのはとても難儀であった。支倉一行が歩いた数年後にこの道を通ったヨーロッパ人の記録によると、川を渡るには筏のようなものに輿をおいて、そこに旅人が座り、4 人の先住民が泳ぎながら筏を押して運んだという。その筏の両側には乾燥させた大きな瓢箪をいくつもぶら下げて浮力をつけていたとも書かれている。

支倉常長一行は陸路をひたすら歩いたのだろうか。スペイン人が到来する前のアメリカ大陸には、まだ車輪がなく大型の家畜もいなかったため、モノを運ぶのは人力のみであった。したがって古道は住民たちが近道をするために急な登りや下りが多く、馬は通れなかったという。スペイン人征服者たちが最初にやったことは馬の通れる道を拓くことであった。やがて数頭の馬やロバあるいはラバの引く運搬用の車が通れる道へと広げていった。その結果 17 世紀初頭にはすでに荷役を専門とする職業が確立していた。しかしそれは、中央



高原の銀山からメキシコ市を経てベラクルスに向かう街道の話である。メキシコ市とアカプルコ間の道はまだ整備されていなかった。このようなルートを支倉一行は、蒸し暑い亜熱帯の低地から4千メートル級の山並みに取り囲まれたメキシコ市まで旅した。スペイン国王とローマ法王への献上の品々や正装用の衣装などは、さぞかし重かったであろう。

17世紀初頭の主要街道近くには、先住民への布教活動の拠点となる修道院が、先住民の襲撃に備えて要塞化した姿で建っていた。商人や荷役隊用の宿もあったが、身分の高い旅人は修道院に宿泊した。支倉常長と共に旅をしたスペイン人ルイス・ソテロはフランシスコ会派の修道士である。同会派はメキシコで最初に布教活動を始め、メキシコ中央高原一帯を主な布教活動地域としていた。支倉一行が通過したイグアラ、タスコ、クエルナバーカにはこのフランシスコ会派の修道院がすでにあっただ。現在のイグアラ市の大聖堂はフランシスコ会派の礼拝堂で、広大な敷地に要塞化された修道院が建っていた。現在のタスコには旧修道院の小さな礼拝堂だけが残っている。クエルナバーカの大聖堂には修道院が現在でもある。いずれの都市でも、支倉一行はこれらの修道院に宿泊したはずである。しかし独立後のメキシコは厳しい反カトリック教会政策をとり、修道院を破壊したため、そのほとんどは残っていない。

支倉一行が滞在したメキシコ市は、現在の中米から北米大陸全域とカリブ海域を管轄するヌエバエスパーニャ副王領の都であった。征服されたアステカ帝国の王宮のあった湖上の首都テノティチトランを徹底的に破壊して、その上に建設されていた。17世紀初頭には完全にアステカ帝国の都は完全にスペイン人の都市となっていた。しかし17世紀初頭に2度の大洪水に見舞われ、市街地は荒廃していた。支倉常長一行が滞在した

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohokuと推定される修道院は現在では跡形もないが、支倉に同行した日本人60数名が洗礼を受けたサンフランシスコ教会の礼拝堂は現存する。

メキシコ市からベラクルスに向かう街道は、メキシコ市から車で2時間ほど南東に向かったところのプエブラで、地図でみるようにここで南回り(オリサバ経由)と北回り(ハラパ経由)の二手に分かれる。南回りの方が50kmほど近道になるが、当時は北回りが主要道路であった。南回り一帯にはスペイン人のタバコ農園がすでに拓かれており、労働力として先住民の他にアフリカ人奴隷を使っていた。しかし農園から逃亡した奴隷と先住民が結託して街道を通る旅人や荷役を襲う物騒な道でもあった。この地域に副王軍の警備隊が配置されるのは、支倉一行が通過した後である。

一方、北回りの要所ハラパ(現在のベラクルス州府)は支倉一行が宿泊したはずのフランシスコ会派の布教活動の拠点である重要な修道院があった。しかし現在はその姿はなく、市民の憩いの場であるファレス公園となっている。ファレスは、19世紀半ばの反カトリック教会政策をとった自由主義勢力を率いた大統領で、メキシコ人が最も尊敬する人物の一人である。

ハラパからベラクルスまでの旅は標高千メートル台から海拔ゼロメートルへと下っていく山道で、鬱蒼とした密林も通過しなければならない。そしてたどり着いたベラクルスの海岸から1キロほどの沖合に浮かぶ小島に、サンファン・デ・ウルア要塞が17世紀初頭にはすでに完成していた。支倉一行は小舟で海岸から要塞に渡り、ここからスペインに向かうガレオン船に便乗してまずキューバのハバナに行き、ここで護衛艦に守られた商船隊に合流してセビリャへと向かった。

支倉遣欧使節が歩いた道筋は、400年後の21世紀には細部で大きく変更されている。山並みをトンネルが貫通し、大小の川に橋が架かった21世紀の高速道路を使えば、アカプルコからメキシコ市まで車で4時間、さらにメキシコ市からベラクルス市まで5時間の旅である。しかしメキシコ中央部の4千メートル級の山岳地帯の険しさに変わりはない。山並みは幾重にも重なり、溪谷は深く、町や村が孤立した点として存在するような地形である。400年前にこの地帯を支倉常長ら一行は、数週間かけて旅をしたのである。

*2016年11月25日の石巻専修大学講演の要約。